安房ゐのはな会 その１

本位田 泰介

幻の安房医師会病院

千葉大学医学部創立135周年記念誌の原稿依頼を受けた時，先づ私の頭に浮んだのは，安房医師会病院のことだった。病院創立から現在の亀田病院への経営移譲迄，44年間安房医師会の先生方と共に見，又共に考え，そして病院の発展と地域医療の充実を私達は思い願ってきた。

現社会の経済不況，医療崩壊，医師，看護師不足，病院経営困難の風潮の中で安房医師会病院は何故生き残れなかったのか。吾々はその検証と分析をする義務と責任はないのか，と自問する時もあった。しかし医師会と云う組織が造った病院の消滅について，私個人が悶々と考え，訴えた所で所詮は空しい繰りごとに過ぎない。色々と原因を追求した所で，はっきりした具体的な事は仲々出て来ないだろう。出て来たとしてもただ空虚感が残るだけだろう。そして現実として今や安房医師会病院が消滅したと云う事実丈が歴史に残る訳である。

前書きが少し長くなったが，135周年記念誌に私が寄稿する気持ちになったのは，この病院が昭和39年に千葉大学医学部と安房ゐのはな同窓会の諸先輩が主役になって創立されたからである。無論他学出身の先生方の御協力，御活躍も多大ではあったが，地方の弱小な一医師会が無から医師会立病院を造ったと云うことは，大変なことであった。

この大変なことを成しとげて他界されて行った吾々の先輩，同僚達の魂は医師会病院消滅の事実も知らずにまだ冥界をさまよっているかも知れない。病院創立時或はその後の病院運営に当られたすべての方々の鎮魂の言葉として，活字に残しておかねばならないと云う一心で，私はこの文を書いて行こうと思った。

思へば昭和39年５月29日，旧病院の屋上での落成式において，当時安房医師会会長の安藤建治理事長が式辞を述べ，武見太郎日医会長が祝辞を述べている情景が，私の頭に浮んで来る。そこに居合わせた医師会役員達の顔や姿は余り思い出せないが，さぞや緊張とこれからの期待や不安で一杯であったろう。

当時，地域保健，地域医療と云う概念と言葉が日医により提唱され，その拠点として医師会立病院が全国各地に設立された。吾々の学生時代は公衆衛生と云う学課で，余り魅力が無かったが，地域の保健事業として安房医師会病院は，各種ガン検診，循環器，呼吸器，糖尿病，若年性高血圧，学童尿精検等を行っていた。特に初めから胃の集団検診を熱心に実施し，安房方式と称されるシステムは全国的に有名となり日医や国からも表彰されたりした。

私は昭和37年に館山市に耳鼻咽喉科医院を開業したが，その２年後には医師会活動として胃集検の受診率を高くするために，夜間町の集会所に出張して住民に早期癌の説明をして啓蒙に努めると云う経験をした。開業したての頃は患者が多く忙しかったが，若かったせいか，又地域保健に対する義務感からか，疲労して嫌になったと云う記憶がない。むしろ充実感の方が大きかったのではなかろうか。

開業して１，２年診察室にこもって多くの外来や入院患者の手術に追われていると，何か外の社会に出たくなり，医師会活動の仕事に私は興味を持つようになった。

湊川河畔の土地を選び，143床の医師会病院と検査センターを設立した時の医師会の御苦労は，病院15周年記念誌に記録されているが，大変なものだった。資金の調達は勿論のこと，常勤医師，看護師，検査技師，放射線技師，その他職員を充実させることに多大の努力が必要だった。特に安房ゐのはな会の先輩達の人脈を通して優秀な人材が集まり医師会病院は設立後，長い間地域医療の中核として発展し貢献して来た。

私は昭和51年に医師会病院専務理事になって，病院内部の諸問題を医師会や病院職員と共に解決して行かねばならない立場になった。

最初にぶつかったのは看護師不足の問題だった。医師会としては東北地方からの集団就職，高等看護学校設立，韓国研修生の招聘等を試みたが，慢性的な看護師不足の状況は続いた。

私はその対策として保育所の建設を市当局に申し入れ，病院近くの特別養護老人ホームの敷地内を借りて新設することが出来た。これは看護師就職の条件として大いに役立った。又，医師会内には「医師会病院を育てる会」を設けて，医師会員が積極的に

育てる意識を持ち，会員がもっと病院を盛り立てて行くにはどうしたら良いかを論じ合った。

又，病院創立15年で建物の老朽化が目立ち矢張病院は明るく，きれいで患者さんに好感を持って貰うと云うことから内外装を新しくした。駐車場も病院の裏に新たに400坪の土地を購入し，職員の車も充分収容出来る様になった。そして，医師会員も病院職員も意欲を新たにして地域の保健医療活動に努力した。昭和54年６月安房医師会病院創立15周年記念式典が海幸苑で行われ，千葉県知事，館山市長，千葉大教授，県町村会長，その他医師会員，職員等200名以上の参加があり，盛況であった。

昭和62年４月から３年間私は，安房医師会会長に任ぜられ，病院の理事長，院長を仰せ付かった。

私は出来る丈病院に出掛けて医師，看護師，その他あらゆる職種の職員と話し合う努力をした。外来，入院患者は増加し，救急体制も徐々に整備され，待望久しかった内科，外科の若手常勤医も決まり，院内は忙しく熱気に溢れていた。透析部門も千葉大第一外科に初めお世話になったが専門医が仲々見つからず苦労していたけれども徐々に充実して来て帝京大学の透析医に大変面倒をみて貰うようになった。

かくして医師会病院は各種集検事業と地域医療の中核病院としてこの安房地域に多大の貢献をして表彰も沢山受けたが，施設の老朽化が進み，新病院建設の機運が広まってきた。

私の会長の時から土地探しが議論され始め，私の次の会長の時，平成５年に館山四中跡地に市からの無償借用が決まった。

この時の医師会執行部，歴代顧問達の喜びは一入であった。早速新病院建設委員会が作られ建設実現のための県市町村への補助金の働きかけ，建設会社の選定等，議論され色々な計画が実行に移された。平成10年10月いよいよ新病院起工式が行われ，以後着々と工事は進行し，約4000坪の土地に病床数149床，６階建，職員数286名の立派な新病院が誕生した。

長年建設を熱望し，苦労してきた医師会長経験者達も工事現場に時々佇み，その堂々とした建物に変容して行く勇姿を万感の思いで眺めていた。

平成12年５月，新病院竣工式，開院披露式典が，県知事も出席して盛大に行われた。

医師会員，職員達も多数参加し，新しくて明るいスマートな現代建築の職場でこれからの地域医療に対する意欲を新たにしていた。

救急医療の件数ものび，入院手術の数も増し病院経営も順調に６，７年は進んで来たと思う。

しかし，私は平成２年に医師会長をやめたので若い世代の医師会執行部と接する機会が減って来た。今から思うとその頃から徐々に若い先生方の医師会離れ，即ち医師会病院離れが進んで来た感じだった。検査センターの利用率も段々減って来た。そして医師会病院の勤務医と若い医師会役員との関係が円滑に行かなくなって来た。若い医師会員が医師会病院を育て発展させようと云う熱意を持たなくなって来た様な状況になった。

同時に経済不況の嵐が吹き続け，医業の経営が困難になり，医者が他人を思う余裕も無くなり自分の仕事丈で精一杯になった。医師看護師の不足も重なり，病院の倒産も現われ，医師会が病院を経営することが誠に困難な世の中になって来た訳である。

若い世代の医師会執行部が医師会病院を不要のものと考えたら，医師会病院はすぐにも消えて行く。ましてや経済環境が悪ければ，加速して行くのは当然であった。

かくして平成20年３月安房医師会病院は亀田病院太陽会に経営移譲された。まさに安房医師会病院は幻になったのである。

この稿を終るに当って又前に述べたことに戻るが，元日医会長武見太郎氏の提唱した医師会病院の理念に熱烈に共鳴し，実行に移した多くの先輩，同僚，特に安房ゐのはな同窓会会員，千葉大学関係者に対して私は感謝の念で一杯である。と同時に医師会病院の永遠の発展を夢み乍ら他界された多くの先生方の御冥福を祈って止まない。

（ほんいでん　たいすけ）